

山・小・屋 造った…ネコも来た！

西丸震哉





文春文庫

363—1

山小屋造った…ネコも来た!

定価はカバーに
表示してあります

1985年1月25日 第1刷

著 者 西丸震哉

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-736301-1

文春文庫

山小屋造った…ネコも来た！

西丸震哉



文藝春秋

山小屋違った…ネコも来た！／目次

山小屋嫌いの山家造り

カメムシの夢 10

山家さがし 22

アルプスの見える候補地

31

山家造り 43

山家暮しにネコも来る

山家の生活 58

ポンポンポンだ？ 73

山寺の鐘 82

雪と音楽 90

風呂の愉しみ 104

食べて出す幸せ 117

ネコたちの話 128

狩人たち 141

山の上から遠くを見れば

西丸式観相法 160

兄との交信 180

UFO物語 186

UFO実見 197

カルシウム文明論 204

地図と探検登山 224

「平均寿命」の落とし穴 255

あとがき 279 文庫版のためのあとがき 281

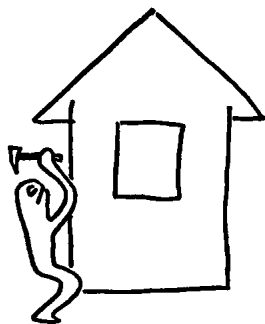
第一部カット
地図
坂田政則
本文カット
高野橋康
著者

山小屋造った…ネコも来た！

単行本

昭和53年10月文藝春秋刊

山小屋嫌いの山家造り



カメムシの夢

人の半数以上が大なり小なりの都市に住むようになってあたりまえのこととしてしているが、そのなかのかなりの割合の人は、仕方がないからそうしているだけで、もし楽しく生きて行けそうなら、このさい望めばきりのない欲をあるていど払い捨てても、山の中かいなかにひっこんでしまいたいと、少なくとも心のどこかでは考えているのではないだろうか。

そりゃあ中には緑なんか見たくもない、都会のゴミゴミしたところをうろついて、地下のバ―あたりでたむろしているほうがよっぽどいいと心から断言できる人もいる。かつて私はそういう人に出会って、人間にもいろいろあるんだなあと感じ入った。

人間という種に統一されているけれども、先祖はまるつきりちがうんじゃないかという気までする。勝手をいわせてもらえば、あのタイプの人はゴキブリが突然変異して、たまたま人の形をしたんじゃないか。



じゃおまえはなんだ？　といわれてオレはチョウチョ、なんていったらぶつとばされるか。それじゃカメムシでもいいや。

ガスはふしぎとよく発生するから先祖はそんなところかもしれない。

秋ぐちになると、カメムシがやたらと家や戸のすき間などにはいり込みたがる。かれらは自然界に密接する家を好ましい存在とみなしているようだ。

ときたま息ぬきに山へ、なんていうのじゃなしに、ずうっと通してそこで暮せたら、といっても今のところはまだそこまでは徹底できなくて、ときたまていど、しかし努力をしてそこに住める時間をどんどんふやしていく、そういう場をとにかく作ってしまおうと決心して実現させた。

この気持ちをよくわかってくれる人はかなり多いと思うので、よし、それじゃあ自分もやるかという気にさせるか、せめてさしあたってえがく夢の材料にもなるかと考えて、この本を同じ先祖から出たであろうかたがたへの贈物とする。

三種の神器と称する、もっともありがたい物が、今から二十何年前には、たしか電気冷蔵庫、テレビ、電気洗濯機だった。テレビといっても色なんかない頃のものだ。

それが数年でピアノ、高級アパート、自動車に変わっていった。

日本人はすべて、いや大部分の人が、そのころ文明のシンボルの物資入手欲に目がくらんで、血相かえてがんばり通したおかげで、とても今までだったら手にできそうもないと思っていた

ものを家に備え、いつとき満足したあと、すぐに欲は次の高みへとつながっていった。今では神器がなんなのか、いろいろいわれているのでよくわからないが、ゴルフの会員権、別荘、メカケ、飛行機の操縦免許、勲章、ヨット、まだまだあるのだろうが人によって違うだろう。ひところはお墓もそうだったんじゃないか。

はじめは耐久消費財だったのが、それが満たされていくうちに、なくてもべつだん困らないもの、しかも金持ち、エリートしか手にできなかったものへのあこがれにまで拡がっていくわけで、考えてみればかわいらしいような庶民のささやかな願望でしかない。ゴルフをやればエリートか、むかしのエリートはゴルフをやったろうが、その逆はどうだかわからない。

自動車だ、いやこんどは別荘などというと、ひと時代前の人や後進国の連中ならおったまげるだろうが、自分だけの空間がほしいという、空気みたいな基本的なものへの欲望にすぎない。

それがなくなつて耐えられなくなり、現代の形式に合わせようとすると自動車や別荘となる。空間とはゆとりのことであり、野獣の主張する自己空間は、他のものが侵入してくるのを拒否する場であり、家畜化するとその空間は自分の身体と同じ容積またはそれ以下にさえ縮小していく。都会人はこの意味では家畜なみにされたようなもので、電車の中などでそれを強烈に知らされる。一メートル以内に近寄るな！　なんてわめいたら、たちまち存在さえも否定される社会で生きているのだ。

このゆとりが心理面でもなくされ続けて、牧場の家畜には与えられている自由時間もなく、

むかしの人や子供のときに勝手に画いた空想さえも出なくなつて、人生はきまりきつたパターンで計測できるものとなり、いくつになつたらいくら収入があり、このくらいたまるとメカケができるとなると、エリート願望意識と同じものだろうが、人どちがつたことをやりたい、路線を外したいと希望する人が出てくる。

ちかごろ優秀な出来の人間が、かえつて体制から外れたがる傾向があるというが、稀少価値を自分の中になにか求めたいという性質は、他とはちがう平均値から離れているという意味での非凡さにつながる。

あいつはちかごろ別荘を作つたようだといわれたら、私のようなタチの人間はアタマにくる。これは別荘なんていう名詞が現在持っているイメージとはまったく別ものなんだぞと腕をふりまわしてわめきたくもなる。

他の人の役に立つか、なにかの指針となるかは、受けとる側次第でちがうから、なんともいえないが、まあひまがあつたら聞いて頂きたい。

番人の住む山小屋をつないで山を歩くことは、荷物を少なくできること、内容は貧弱化しても食事作りから解放されることで、体力的、時間的にはかなり楽かもしれない。しかしせっかく山なり自然界にもどっていくというのに、夕方から朝へかけての、一日の三分の二ほどを人まかせ、人造物の中に自分を埋めこんでしまつて平気である、こんなものだと思ひこんでいるうちは、まだ自然界を遠くから眺めている段階でしかない。

自然がこわいものではないと気付くようになれば、そしてできるだけ長いあいだ自然の中に生きていたいと思うようになると、既成の山小屋の絆きずなから解放されようとしはじめる。山小屋に番人がいると金をとられるというシミッタレ根性も当然これに加わって、より安く、より楽しく、より自主性のある山歩き、山中生活がなされる。

山歩きをはじめてから数年のあいだに、私は山小屋のきたなき、人のうるさき、混雑などに生理的嫌悪感を抱き、それに馴なれ、適応するどころか、ますます離反する方向へ自分が進んでいくのを押える気にはならなかった。

無人の山小屋か、季節外れで番人がいなくなって開放されたものが、自分の計画の中で、活用すると便利などころにあるとき、そこへもぐり込んだり、数日間の基地として使うばあいもあったが、テント生活や野宿よりもはるかに楽ではありながら、すみずみにきたならしきが充満しているのが神経を逆なですることからも、私は山小屋嫌いとなった。

とくに単独行が多かったから、多人数が傍若無人にふるまうその空間がやりきれないという気分もあった。おかげで山小屋の常連になることもなかったし、顔を覚えられることさえもあり得なかった。

人の気配がない別世界のようなところへ出てきたとき、そしてそこでテントの一夜をすごすとき、こんなところに自分の専用の小屋を建てて住みついたら、たとえ一時的でもいいから生活をしたらいだらうなど考えるようになった。

しかし若さがあるうちは、根拠地を固定してしまうと、あちこちの山をさすらい歩くために

は、これが足カセの作用をするだろうという怖れもあって、うっかり決心はできないなと思う。中学生のころ、八ヶ岳とその南麓が気に入って、入りびたっていた時代があったが、当時、中央線の駅から一時間以上も山に向って歩いた原の上縁あたりの、アカマツとシラカンバの林が混在する、南アルプスと富士山が前面に広がる一帯が「坪十銭で買えるよ」といわれて、そのくらいなら貧乏な中学生の小遣いでも何とかなるぞ、と大喜びで父に話したら、家賃十円の借家生活の身分で、そんなとんでもないことを考えるとは不とどき千万であると一喝されてしまった。

土地を買っておくと値上がりするなどという考え方がまったくなかった時代だし、もし買ったところで財産になるようなものじゃなかったろうが、ただここに小屋を建てたらいいだろうなという願望だけの純情そのものが封じられた心の痛手はかなりだったように記憶する。

今、そのあたりが別荘分譲地になったりしているのを見ると、考え方が何十年も早まっていたんだなど感無量、といたいところだが、そういう変り方をしたところには住んでいられないから、開発に迫られるクマの心境を理解しながらどこかへ逃げていったことだろう。

山登りに精魂をかたむけていたころは、自分の山小屋なんかまったく考えもしなかったといいたいが、それでもた

